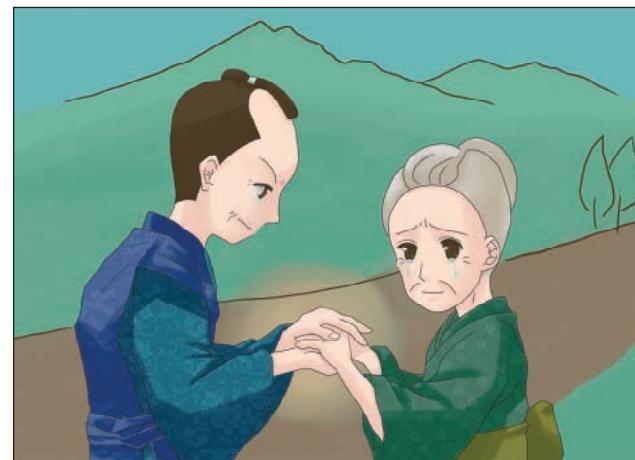


お銀さま



登場人物

ナレーター
お銀(まち)

老人
渡辺華山
村の女1
村の女2

村の女2	村の女1	老人	渡辺華山	ナレーター	お銀(まち)	登場人物
------	------	----	------	-------	--------	------



1



2



3



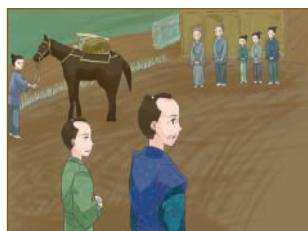
4



5



6



7



8

今から百数十年前のことです。相模のくに早川村に、まちという名の、野菊のよくな清楚で美しい娘が住んでおりました。まちは百姓の幾右衛門の娘で、村でも評判の気立ての優しい働き者でした。

まちが十八歳のとき、江戸は巣鴨のお屋敷に奉公に行くことになりました。このころ、行儀作法を身につけるために、江戸のお屋敷にあがる村娘たちがいたのです。とは言え、誰もが行けるというわけではなく、大きな農家のそれも選ばれた娘たちだったのです。

村の女 1

「あのよ、幾右衛門さんの娘は江戸に行くそうだよ」

村の女 2

「そうそう、巣鴨のお屋敷にあがるんだつてよ」

村の女 1

「さすが幾右衛門さんの娘だ。あの器量よしだものなあ」

村の女 2

「ほんと、うらやましいことだよ」

こうして江戸田原藩のお屋敷に奉公にあがつたまちは、そこで少年渡辺登と出会います。まちは登をたいそうかわいがり、登にと

つてまちは姉のように慕うとても大事な人となりました。渡辺登、
後の渡辺華山との大きな出会いでした。



まちはお屋敷ではギンと呼ばれていました。そのお屋敷で、ギン
にとつてはもうひとつ運命的な出会いがありました。
時の藩主、三宅康友の側室となり、「お銀さま」と呼ばれるよう
になつたのです。その後、男の子友信が生まれ、幸せな日々を過ご
していました。

ところがその幸せもつかの間、それからほどなく早川村の母が、
はやり病で突然亡くなつてしまつたのです。急ぎ、くにに帰つた
ギンは、再び江戸に戻ることはありませんでした。



ときは静かに流れ、二十数年の後のことです。

小園村に、その辺りではめつたに見かけることのないひとりのお
侍の姿がありました。弟子を連れた渡辺華山でした。通りがかり
の老人に幾右衛門のこと尋ねていきました。



華山

老人

華山

「早川の幾右衛門といふ人を知らぬか？」

老人は、お侍さむらいに幾右衛門いくえもんのことをしていねいに教えました。

「この細い道を入つていくと村が見えてくるだ。そこが早川村だよ。その辺へんで幾右衛門と聞いてくれれば、すぐおわかりになりますよ」

それから、老人は幾右衛門のことを詳しく話し出しました。

老人の話から、幾右衛門が八十歳ぐらいになること、江戸のお屋敷つかに仕えていた娘が錦にしきを飾かざつて帰かへつてきたものの、母の急死きゆうしで娘こぞねは小園村の大川清藏せいぞうといふ人の所に嫁とついだことなど、詳しいことがいろいろとわかりました。

華山は、お銀さまが元気に暮らしていることを知り、
「早くお銀さまにお会いしたい」

と、足を速めました。

村の子どもたちが遊んでいるところへかけ寄り、
「幾右衛門の家はいづこぞ？ 清藏の家はいづこぞ？」

と、矢継ぎ早に尋ねました。

そして、清藏の家は幾右衛門の家より近いと知られ、子どもた

ちに案内させました。

地蔵堂じぞうどうを通り過ぎたところでいがぐり頭の子どもに会い、清藏の子だとわかると、その子の顔に尋ねる人の懐かしい面影なつかしこのめいを見ました。

「そなたの家はいづこぞ？」

と聞くと、清藏の子はその問いかけには答えず、急いで走つて行きました。華山はそのあとを追い、とうとう目ざす家に行きついたのです。その家はたいそう大きな農家のうかでした。

「ごめん。誰かおらぬか？」

「どちらさままでございましょうか？」

頭に手拭てぬぐいをかぶつた年老としのおいた女の人じんが、恐おそる恐おそる尋ねました。

「子どもはお銀さまによく似いにているが、この人は姑しゅうとうめだらうか？」

と思つたものの、よく考えればもう二十年あまりの年月が経つているのだと思い、

「昔の姿のままでいるはずがない」

と、よくよく顔を眺めると、耳の下に大きなイボがあつたのです。これはまぎれもなくお銀さまに違ちがいないと思い、

華山

華山

まち

華山

華山



華山

「それがしは、子どものころとてもよくしていただいた方を探して
おります」

「さようでございますか。もしや人違ちがいではございませんか？」

「あなたの名は？」

「私の名はまちと申します」

「昔の名は何と？」

「まちでございます」

「お銀もうと申せしことはなかつたか？」

「昔江戸におりました頃、そのように呼ばれていたこともございま
したが・・・」

「もしや、あなた様は江戸よりおいでになられたのでございましょ
うか？」

と、初めの態度たいどとはうつてかわり、

「まずは奥おくへお入りください」

と、頭の手拭てぬぐいを取り招まねき入れました。

その顔を見て、華山は間違まちがいなくお銀さまと確信かくしんしました。

探し

ていた方にやつと巡り合えた喜びに、華山のほほに思わず涙が伝うのでした。

華山

まち

「さて、それがしの名を覚えておられようか？」

「されば、渡辺の登さまで？こんなところまでよくお出でくださいました。まるで夢のようでござります」

ふたりは互いの思いを心ゆくまで語り合いました。華山は子どもの頃の礼を尽くし、また、お銀さまの孫にあたるしん太郎が立派に成長したこと 등을伝えるのでした。

まちは、用事で出かけている夫清蔵の留守を詫びるとともに、傍らにいる四人のわが子を次々に紹介すると、一同はずらつと並んでお辞儀をするのでした。



そのうち、長男清吉が厚木から馬を引いて帰り、その清吉を見た華山は、たくましく素朴な男の子だと思いました。

まちが、華山を精一杯もてなしていると、そこへまちの父幾右衛門もかけつけ、ささやかな宴となりました。



いつしか日も西に傾きかけ、農作業の妨げになることを思い、
華山は名残惜しくも大川家を後にしました。

清吉の勧める馬には乗らず、頭陀袋(注1)と笈(注2)を持つてもらい、
家族一同の見送りを受けて出発しました。

それを見ていた村の人々は皆肝きゅうをつぶし、それぞれの門口かどぐちに立ち
見送るのでした。

遠く大山の山並みには夕日が映え、華山の心も久しぶりに母の
ようなぬくもりを感じていました。そして、満ち足りた思いで、今宵
泊まりの厚木へと向かうのでした。

注1 頭陀袋(注3) だぶだぶして何でも入るような袋

注2 笕(注4) 旅の際、物を入れ背負って持ち運ぶ、竹で編んだ箱

※ 小園の共同墓地にお銀さまの墓石が今も残されています。